

# 平成29年度学校評価結果報告書

(年度末評価)

平成30年4月26日

広島県立熊野高等学校

# 目 次

- 1 平成29年度自己評価シート（年度末評価）
- 2 平成29年度自己評価シート（年度末評価まとめ）
- 3 平成29年度学校関係者評価シート（年度末評価）

平成 29 年度自己評価シート(年度末評価)

校番	57	学校名	熊野高等学校	校長氏名	山田 哲也	全・定・通	本
----	----	-----	--------	------	-------	-------	---

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
1 一人一人の生徒の力を最大限に発揮させ、自信と誇りを持って果敢に挑戦する生徒を育てる学校							
確かな学力を身に付けさせ、希望進路を実現させる。	家庭学習時間(1日平均)	144分	150分	126分	D	昨年度と比較して大きく数字を落とした。	教務部
	体験活動実施後のアンケートで、自己存在感、自己肯定感が増した(「うまく交流できた」と回答)生徒割合	20%	23%	35%	A	「福祉・介護の現場体験」実施後のアンケートにおいて35%の肯定的回答があったため。	進路指導部
	各種検定3級以上の合格者数(英検、漢検、ワープロ検、サービス接遇検等)	80人	100人	95人	A	合格者数は2月22日時点で95名ではあるが、2月実施分で英検漢検に90人以上受験があるため。	学年各科
	進路マップ基礎力診断テスト1年4月から2年4月を比較したDゾーン生徒割合(%)の減少率	0%	3%減	0.2%増	C	Dゾーン生徒が0.2%増加した。	進路指導部
	授業評価アンケートにおける肯定的な回答の割合(2回実施)	84%	86%	86%	C	昨年よりやや上がっているが、ほぼ同じといえる数値である。	教務部
	学力調査平均通過率の伸び率(前年度教科平均比較)	-1.0%	2%	-0.5%	D	目標値を達成できず、ほぼ昨年と同値であった。	教務部

【評価結果の分析】

- ・昨年同時期との比較では1年139.2→129.0、2年144.7→119.9、3年149.1→129.4 全体144.1→126.2 とどの学年も学習時間が大きく減少している。原因としては、課題を出させる取り組みとして普段から家庭学習をチェックして確認しているため、試験前1週間の学習時間が減少したものと思われる。(教務部)
- ・授業評価アンケートの結果は昨年同様、数値が高止まり状態になっている。(教務部)
- ・学力調査に思考力を問う問題が増加し、平均通過率が下がったが、今年も昨年とほぼ同等の結果となっている。(教務部)
- ・「福祉・介護の現場体験」では実施前の体験に対する評価で56%の生徒が「期待していない」と回答していたが、実施後は97%の生徒が「行ってよかった」との肯定的評価をしている。また、自由記載欄においては「新たな自分探しになった」「周囲の高齢者の方をみようと思えたから」等自分の変化に成長を実感したものが多く見られた。(進路指導部)
- ・各教科の積極的なアナウンスにより、生徒の検定参加状況が変わった。(進路指導部)
- ・Dゾーン生徒割合が0.2%増加しているが、国数英の三教科で見ると、国語11.3%の増加。数学2.6%の増加。英語15.1%の減少であった。国語ではCゾーンにおいては34.2%が36.1%に増加したにもかかわらず、A・Bゾーンにおいて23%から10.4%へ減少がみられた。逆に数学ではCゾーンにおいて34.3%が30.1%に減少し、A・Bゾーンは11.2%が12.8%増加している。(進路指導部)

【今後の改善方策】

- ・家庭学習課題について今後も各教科できめ細かい取り組みを粘り強く続け、学習習慣を身につけさせる必要がある。(教務部)
- ・すぐに数値に表れなくとも、授業改善については引き続き続けていく。(教務部)
- ・教科主任会議を通じて「学びの変革」にむけた取り組みを行っており、今後もすすめていく。(教務部)
- ・今後とも体験活動を通じて自己存在感、自己肯定感を感じさせる取り組みを進める。(進路指導部)
- ・来年度も各教科に対してアナウンスをお願いすると共に、各種検定の有用性をアピールする。(進路指導部)
- ・国語科には上位層に対する対策を、数学科には中間層への対策をお願いする。(進路指導部)

2 「友愛・誠実・勤労」の校訓を基盤として、これからの厳しい時代を生き抜く力を生徒に育成する学校

ルールやマナーを身につけ、高校生として自覚を持った行動ができる。	1日平均の遅刻者数(人/日)	3.4	3.2	3.6	C	遅刻を繰り返す生徒が昨年より増えたことが要因である。	生徒指導部
	遅刻の達成日数(日/年)	16	20	22	A	遅刻した生徒への指導を放課後に行うことで意識付けはできた。	
	チェックシートの複数回指導生徒数(人/月)	8	7	3	A	規範意識を持たせていく説諭指導を地道に行った結果といえる。	
	特別指導件数(件/年)	6	5	13	D	暴言が件数の半数を占める。心に寄り添う指導が不足した。	
	学校評価アンケート項目「社会のルールを守る態度育成」の肯定率(%)	保護者70	保護者72	保護者76	A	ルールブックを保護者用に配布したことで指導規程の内容理解を促すことができた。	
	生徒生活チェックアンケート項目「校内美化及び校外美化の励行」の肯定率(%)	73%	75%	73%	B	目標値をわずかに下回ったが、昨年度と同じ数値である。	保健部

【評価結果の分析】

- ・毎朝の一礼挨拶入門指導は、教職員・生徒会生徒・部活動生徒・保護者も参加して、日々確実に実施してきたことで、生徒の登校時間を守るという規範意識は高められているが、一部の遅刻が常習化している生徒が遅刻数を増やしている。2学期から遅刻者に対しては、放課後に生徒指導主事からの説諭を行っている。それにより2学期以降は遅刻数が減少傾向にある。(生徒指導部)
- ・服装指導でチェックシートの指導対象となる生徒数は、ここ数年減少傾向にある。この理由として、毎朝のSHR前にクラス単位で実施する服装検査が浸透していることがあげられる。また違反を発見したらその場で直させるという当たり前の指導もできている状況もある。さらに全教職員が意識統一して、指導のずれが起こらないようにしていくことが求められる。(生徒指導部)
- ・特別指導件数は大幅に増加した。その内訳のなかで、約半数が教職員への暴言指導である。頭ごなしに言われることで冷静さを失い、暴力的な言葉が思わず出てしまう傾向が見られる。教職員の側にも生徒への対応において、生徒に寄り添う姿勢が欠けている状況も見受けられる。日頃からお互いにコミュニケーションを取り合うことで、教職員・生徒間のさらなる信頼関係を構築していかなければならない。教育相談部との連携もさらに図りながら継続的な指導を続けていく。(生徒指導部)
- ・美化については、昨年度に続き美化週間を設けた。2年目ということでスムーズに行え、日頃できない箇所について効果的に掃除が実施できた。美化委員は当日の点検と報告、翌日のSHRでのクラス呼びかけなどの活動を活発に行った。また、日頃のゴミ出し状況の気づきを美化だよりとして発行し、美化意識の高揚を呼びかけた。校外清掃は昨年通り各学年2回計画したが、天候の状況やLHRの内容変更によりやむを得ず中止することがあった。(保健部)

【今後の改善方策】

- ・遅刻指導は、生徒指導主事の説諭がなくても、生徒自身が意識をして時間を守るという当たり前のことができるのが理想である。しかし遅刻が常習している生徒には、何らかの指導を加える必要がある。保護者へ連絡して指導の協力を得ることで、学校と家庭の両面で指導を行っていく。そのためのより効果的な遅刻指導の在り方を考えていく必要がある。(生徒指導部)
- ・チェックシートの複数回数指導生徒数は、年々減少している。さらに生徒には制服を正しく着こなすことが、社会に認められ自身の進路実現にも繋がることをしっかりと理解させていきたい。(生徒指導部)
- ・特別な指導となった生徒には、その指導を通して自己を見つめて自己理解を深めながら自省させ、自身の問題点に向き合わせていく指導を行っている。指導後にもまた同じことをして指導に入るという生徒はいない。しかし指導後時間が経つことで、段々と緊張感が薄れていく生徒も多い。特別指導となった生徒は、その後もしっかりと様子を見ていき必要なケアをしていく指導が必要である。(生徒指導部)
- ・校外清掃については、回数・時期・方法など内容の見直しが必要である。また、日頃の掃除についても工夫し掃除の徹底を図ってきたい。(保健部)

3 地元幼・保・小・中学校、地域社会と一体となった教育活動を展開するとともに、大学等との連携を通じて、音楽・美術・書道をはじめ、専門的な教育を推進する学校

音楽・美術・書道の専門的な教育を推進し、希望進路を実現する。	全国・全県規模の受賞者数	90%	92%	92.3%	A	芸術類型2・3年生 52名のうち今年度の受賞者は 48 名であった。美術 24 人中 24 人、書道 14 人中 14 人、音楽 14 人中 10 人	芸術科
	学校評価アンケート項目「芸術類型など、特色ある教育活動の取組状況」の肯定率(%)	保護者 83%	84%	保護者 86%	A	保護者対象学校評価アンケートにおいて、はいと回答した保護者は、一致する 46%、ある程度一致する 40% で計 86%であった。	
	進路第1希望の達成率	76.9%	78%	77%	A	芸術類型3年生 22 名の内、今年度該当者は 17 名であった。	
学校行事や生徒会・部活動等を活性化するとともに、生徒・保護者・地域の学校に対する満足度を向上させる。	入学生における熊野町内の中学校卒業生の占める割合	平 29 選抜 40.0%	平 30 選抜 45%	平 30 選抜 50.7%	A	平成 30 年度の入学生における熊野町内の中学生の占める割合は 50.7%であった。	総務部 生徒指導部(生徒会)
	オープンスクールの参加者数	304 人	340 人	319 人	B	開催日が他校と重なったこともあり、目標値に到達できなかった。	
	学校評価アンケート項目「教育目標や方針のわかりやすい伝達」の行程率(%)	69%	70%	73%	A	目標値を上回る肯定的回答を得ることができた。	
	学校評価アンケート項目「本校 HP 等、学校情報の適切な発信状況」の行程率(%)	81%	80%	83%	A	行事について熊高たよりの発行・HPへの記載などにより目標値を上回るすることができた。	
	PTA総会への保護者の出席数(%)	17%	20%	23%	A	昨年度の割合が大きく伸び目標値を上回ることができた。	
	文化祭・体育祭への入場者数	1400	1450	1402	B	ほぼ昨年度と同じ入場者数であった。	
部活動への加入率(9月調査)	64.0%	69%	61%	C	部活動をやめる生徒がいる。魅力ある部活の在り方を考える。		

【評価結果の分析】

- ・オープンスクールの日程調整を近隣校 1 校だけしかおこなわず、本年度も近隣校と同じ日時となってしまった。
- ・「教育目標や方針のわかりやすい伝達」「本校HP等、学校情報の適切な発信状況」については、HPに行事・活動状況などをその都度更し情報発信できた。
- ・学校行事や活動状況を、熊高たよりにのせて近隣の学校・自治会などに配布、また熊高連絡メールの活用により多くの地域・保護者の皆さんに情報発信することができた。
- ・PTA総会の参加率については、集計率が高まるように工夫をおこない 1 学年を中心に昨年度の出席数を上回ることができた。
- ・芸術類型の生徒はコンクール等の受賞をきっかけに自信を持ち、更なる成長につながっている。また発表の場で注目されていることを自覚し、自己肯定感を強めている。これらの取組が各自の進路希望の実現という形になって結実している。
- ・「熊高たより」に芸術類型(美術部・書道部・吹奏楽部)の記事を取り上げる機会は多くある。加えて今年度はホームページの芸術類型のページを刷新し、取り組みと成果を幅広く公開することができた。
- ・本年度芸術類型の進路は 22 名中芸術計 12 名(55%)、大学 13 名(59%)、短大 1 名(5%)、専門学校 4 名(18%)、就職 4 名(18%)であった。進学希望者 18 名(82%)の内、芸術系は 10 名(56%)であり、通常クラスより芸術系の割合は高いが、各方面への進路希望も幅広くかなえることができていると言える。第 1 志望の達成率は 77%であるが、第 2 志望を含めると 91%(未決定 2 人)となる。
- ・書道コースでは大学進学 5 名、就職 2 名となった。進学者のうち 3 名が書道を専門とする進学先を選択した。全国展レベルの大会において、

半数以上の生徒が特別賞等上位の賞を受賞した。地域活動においても、要請に応じて書道活動を行い、地元中学との書道交流も実施していくことで、地域に貢献し社会性を養うことができた。

・音楽コースでは、各種ソロコンクールへの出場や、ハイスクール・ミュージックコンサートで優秀賞(第2位)を受賞するなど、個人の技能について成果をあげている。音楽大学への進学や幼児教育方面への進学も叶え、コースで学んだことを進路実現に生かしている。吹奏楽部での活動も合わせて規範意識が高められ、また社会性も培われている。

・美術コースでは広島県高等学校総合文化祭において上位入賞を果たし、次年度全国高等学校総合文化祭へ推薦された。全国展である高校生現代アートビエンナーレでも多数入賞を果たした。学校賞に3度も選ばれ、団体として活動が評価された。進学に関して、美術コースでは早期取組みの成果として広島大学へ1名合格し、教育提携校である倉敷芸術科学大学へは特待生として1名の生徒が合格した。

・部活動の加入率はこの数年、60%前後で推移している。年度当初は加入する生徒が多く活性化した状況が校内に見られるが、徐々に部活に位置づらくなる生徒が出てくる。部会の人間関係に悩む生徒も多い。部活の在り方を見直す必要がある。顧問も日頃の部員の様子を把握して、適切な指導を行っていかねばならない。(生徒指導部)

・入学生における熊野町内の中学校卒業生の占める割合は、平成24年度から平成26年度までは30%台での推移し、平成27年度に40%台に回復、40%台で推移していた。今年度(平成30年度入学生)は、定員が40名減となったが50.7%となり10.7ポイント増となった。熊野町内の中学生に本校の取組や進路状況等が理解されつつあると考えている。

#### 【今後の改善方策】

・オープンスクールの日程調整を複数の近隣校に確認しながら開催日が重ならないようにしていく。

・引き続き熊高たより・熊高連絡メール・熊野ファイルの活用・HPの充実を図り、学校行事や生徒の活動状況を知らせていきたい。

・引き続き、全国・全県レベルの大会に積極的に参加、出品することで、生徒に常に向上していこうとする意識をもたせていく取組が必要である。

・専門的な内容の充実を図る一方で、「芸術類型は熊野高校の看板である」という自覚を促すことがコースの生徒を育ててきた。集大成としての卒業演奏会、および卒業作品展と作品解説では準備計画、当日の運営を生徒に任せる方向で取り組んでおり、今後これをさらに進めていく。今後も芸術類型が熊野高校の一番の特色として自他共に認められるよう生徒に自覚させ努力させるとともに、様々な方面からの支援をお願いしたい。

・部活動の活性化に向けては、加入者を増やすことも必要であるが、部活動の在り方も考えていく必要がある。試合に勝つためにはこつこつ練習を重ねていくことが必要であるが、その努力を面倒と感じて部活動に出てこなくなる生徒も見られる。生徒には多様な価値観があり、部活動の目指す方向性はそれを勧誘して見極めていくことが大切である。顧問と生徒がしっかりと連携して、部活動の在り方を考えることが先決で、そのうえで生徒が納得する方向性を示してやるのが教育的配慮であると考えている。(生徒指導部)

・中学生には、本校の取組や進路実績等が把握されてきていると感じているが中学生の保護者の世代や熊野町内の人々にはまだまだ情報が伝わっていないと考える。地域の人を対象とした本校生徒による公開講座の実施等、地域の人々に対しての効果的な広報活動の工夫・改善を行っていきたい。

校番	57	学校名	熊野高等学校	校長氏名	山田 哲也	<input checked="" type="radio"/> 定・通	<input type="radio"/> 本・分
----	----	-----	--------	------	-------	--------------------------------------	---------------------------

## 評価結果の分析

## 1 一人一人の生徒の力を最大限に発揮させ、自信と誇りを持って果敢に挑戦する生徒を育てる学校

- ◎ 確かな学力を身に付けさせ、希望進路を実現させる。
- 生徒の学習習慣の確立
 

各学年学習時間が大きく減少した。原因としては、課題を提出させる取組として普段から家庭学習をチェックして確認しているため、試験前1週間の学習時間が減ったと思われる。また、居残り指導を行っているため、学校での学習に安心し家庭での学習時間が減ったと考える。
- 検定合格者数 (漢検、英検、数検)
 

学習意欲を高め、就職や進学にも活用でき、また家庭学習の習慣化のためにも資格や検定の受験を進めてきた。英語検定・漢字検定の受験者数が90名以上となった。また、進路を見据え、ワープロ検定、情報処理検定、サービス接客検定に挑戦する生徒も増えた。
- 学習到達ゾーンの活用
 

Dゾーン生徒割合が0.2%増加しているが、国数英の三教科で見ると、国語11.3%の増加、数学2.8%の増加、英語15.1%の減少であった。国語ではCゾーンにおいては34.2%が36.1%に増加したにもかかわらず、A・Bゾーンにおいて23%から10.4%へ減少がみられた。逆に数学ではCゾーンにおいて34.3%が30.1%に減少し、A・Bゾーンは11.2%が12.8%増加している。

## 2 「友愛・誠実・勤労」の校訓を基盤として、これからの厳しい時代を生き抜く力を生徒に育成する学校

- ◎ ルールやマナーを身につけ、高校生として自覚を持った行動をとらせる。
- 遅刻指導の徹底
 

毎朝の一礼挨拶入門指導は、教職員・生徒会生徒・部活動生徒・保護者も参加して、日々確実に実施してきたことで、生徒の登校時間を守るという規範意識は高められているが、一部の遅刻が常習化している生徒が遅刻数を増やしている。2学期から遅刻者に対しては、放課後に生徒指導主事からの説諭を行っている。それにより2学期以降は遅刻数が減少傾向にある。
- 服装・頭髪指導の徹底
 

服装指導でチェックシートの指導対象となる生徒数は、ここ数年減少傾向にある。この理由として、毎朝のSHR前にクラス単位で実施する服装検査が浸透していることがあげられる。また違反を発見したらその場で直させるという当たり前の指導もできている状況もある。さらに全教職員が意識統一して、指導のずれが起こらないようにしていくことが求められる。
- 問題行動の未然防止
 

特別指導件数は大幅に増加した。その内訳のなかで、約半数が教職員への暴言指導である。頭ごなしに言われることで冷静さを失い、暴力的な言葉が思わず出てしまう傾向が見られる。教職員の側にも生徒への対応において、生徒に寄り添う姿勢が欠けている状況も見受けられる。日頃からお互いにコミュニケーションを取り合うことで、教職員・生徒間のさらなる信頼関係を構築していかなければならない。教育相談部との連携もさらに図りながら継続的な指導を続けていく。
- 校内外の美化
 

美化については、昨年度に続き美化週間を設けた。2年目ということでスムーズに行え、日頃できない箇所について効果的に掃除が実施できた。美化委員は当日の点検と報告、翌日のSHRでのクラス呼びかけなどの活動を活発に行った。また、日頃のゴミ出し状況の気づきを美化だよりとして発行し、美化意識の高揚を呼びかけた。校外清掃は昨年通り各学年2回計画したが、天候の状況やLHRの内容変更によりやむを得ず中止することがあった。

## 3 地元幼・保・小・中学校、地域社会と一体となった教育活動を展開するとともに、大学等との連携を通じて、音楽・美術・書道をはじめ、専門的な教育を推進する学校

- ◎ 音楽・美術・書道の専門的な教育を推進し、希望進路を実現する。
- 全国・全県規模の受賞者数
 

音楽コースでは、各種ソロコンクールへの出場や、ハイスクール・ミュージックコンサートで優秀賞(第2位)を受賞するなど、個人の技能について成果をあげている。音楽大学への進学や幼児教育方面への進学も叶え、コースで学んだことを進路実現に生かしている。吹奏楽部での活動も合わせて規範意識が高められ、また社会性も培われている。

美術コースでは広島県高等学校総合文化祭において上位入賞を果たし、次年度全国高等学校総合文化祭へ推薦された。全国展である高校生現代アートビエンナーレでも多数入賞を果たした。学校賞に3度も選ばれ、団体として活動が評価された。進学に関して、美術コースでは早期取組みの成果として広島大学へ1名合格し、教育提携校である倉敷芸術科学大学へは特待生として1名の生徒が合格した。
- 芸術類型進路状況
 

本年度芸術類型の進路は22名中芸術計12名(55%)、大学13名(59%)、短大1名(5%)、専門学校4名(18%)、就職4名(18%)であった。進学希望者18名(82%)の内、芸術系は10名(56%)であり、通常クラスより芸術系の割合は高いが、各方面への進路希望も幅広くかなえることができていると言える。第1志望の達成率は77%であるが、第2志望を含めると91%(未決定2人)となる。

書道コースでは大学進学5名、就職2名となった。進学者のうち3名が書道を専門とする進学先を選択した。全国展レベルの大会において、半数以上の生徒が特別賞等上位の賞を受賞した。
- ◎ 学校行事や生徒会・部活動等を活性化するとともに、生徒・保護者・地域の学校に対する満足度を向上させる。
- オープンスクール参加者
 

オープンスクールの日程調整を近隣校1校だけしかおこなわず、本年度も近隣校と同じ日時となってしまった。

学校行事や活動状況を、熊高たよりにのせて近隣の学校・自治会などに配布、また熊高連絡メールの活用により多くの地域・保護者の皆さんに情報発信することができた。
- 学校の情報発信
 

入学生における熊野町内の中学校卒業生の占める割合は、平成24年度から平成26年度までは30%台での推移し、平成27年度に40%台に回復、40%台で推移していた。今年度(平成30年度入学生)は、定員が40名減となったが50.7%となり10.7ポイント増となった。熊野町内の中学生に本校の取組や進路状況等が理解されつつあると考えている。
- 保護者の行事参加
 

PTA総会の参加率については、集計率が高まるように工夫をおこない1学年を中心に昨年度の出席数を上回ることができた。

## 今後の改善方針

### 1 一人一人の生徒の力を最大限に発揮させ、自信と誇りを持って果敢に挑戦する生徒を育てる学校

◎ 確かな学力を身に付けさせ、希望進路を実現させる。

○生徒の学習習慣の確立・補習の充実は、今後の本校にとって最重要課題である。

- ・家庭学習課題について今後も各教科できめ細かい取り組みを粘り強く続け、学習習慣を身につけさせる。
- ・教科主任会議を通じて「学びの変革」にむけた取り組みを行っており、今後もすすめていく。
- ・今後とも体験活動を通じて自己存在感、自己肯定感を感じさせる取り組みを進める。
- ・国語科には上位層に対する対策を、数学科には中間層への対策をお願いする。

○そのためには、教職員の授業力向上が核となる。

- ・教科主任会を中心に、本校の生徒実態に即した「基礎学力」を高める取組や家庭学習時間を増やす取組を組織的に行う。生徒がアクティブに考え、主体的に学ぶ姿勢を育てていきたい。
- ・「学びの変革」を進め、生徒がしっかり考え、自らの考えを的確に発信できるよう、また、生徒が主体的に授業に参加し学ぶ姿勢を持たせる授業改善に引き続き取り組む。

### 2 「友愛・誠実・勤労」の校訓を基盤として、社会性の確立した生徒に鍛える学校

◎ ルールやマナーを身につけ、高校生として自覚を持った行動をとらせる。

○今後も、生徒指導の方向を、ルールからマナーへ質的向上を図る意味からも、一礼入門等、遅刻指導から挨拶指導にステップアップしていく。

遅刻指導は、生徒指導主事の説諭がなくても、生徒自身が意識をして時間を守るという当たり前のことができるのが理想である。しかし遅刻が常習している生徒には、何らかの指導を加える必要がある。保護者へ連絡して指導の協力を得ることで、学校と家庭の両面で指導を行っていく。そのためのより効果的な遅刻指導の在り方を考えていく必要がある。

チェックシートの複数回数指導生徒数は、年々減少している。さらに生徒には制服を正しく着こなすことが、社会に認められ自身の進路実現にも繋がることをしっかりと理解させていきたい

・校外清掃については、回数・時期・方法など内容の見直しが必要である。また、日頃の掃除についても工夫し掃除の徹底を図っていく。

### 3 地元小・中学校、地域社会と一体となった教育活動を展開するとともに、大学との連携を通じて、音楽・美術・書道の専門的な教育を推進する学校

◎ 音楽・美術・書道の専門的な教育を推進し、希望進路を実現する。

引き続き、全国・全県レベルの大会に積極的に参加、出品することで、生徒に常に向上していこうとする意識をもたせていく取組が必要である。

専門的な内容の充実を図る一方で、「芸術類型は熊野高校の看板である」という自覚を促すことがコースの生徒を育ててきた。集大成としての卒業演奏会、および卒業作品展と作品解説では準備計画、当日の運営を生徒に任せる方向で取り組んでおり、今後これをさらに進めていく。今後も芸術類型が熊野高校の一番の特色として自他共に認められるよう生徒に自覚させ努力させるとともに、様々な方面からの支援をお願いしたい。

◎ 学校行事や生徒会・部活動等を活性化するとともに、生徒・保護者・地域の学校に対する満足度を向上させる。

オープンスクールの日時については、近隣校の情報や、中学校の行事予定を確認して最終調整を行う。

熊高たより、熊高連絡メールを引き続き活用して、学校行事や生徒の活動状況を知らせていく。

PTA総会の出席率を上げるために、講演会を盛り込むなど工夫を行う。GWから1週間後に開催する。

文化祭・体育祭など、学校行事の充実した内容を、熊高たより、HP、熊高連絡メールを活用し地域・保護者・小中学校に情報発信していく。

中学生には、本校の取組や進路実績等が把握されてきていると感じているが中学生の保護者の世代や熊野町内の人々にはまだまだ情報が伝わっていないと考える。地域の人を対象とした本校生徒による公開講座の実施等、地域の人々に対しての効果的な広報活動の工夫・改善を行ってきたい

## 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針

○熊野高校の特色でもある芸術類型を中心に、熊高の良さをアピールする。熊校独自の取組や大学への進学率や学力向上の取組が中学生、中学生の保護者、地域の人々にも伝わるよう広報に努める。熊野町の子供が熊野高校へ進学したいと思えるような取組をさらに充実する。

○多様な生徒が多い中で、今後も、生徒指導の徹底による高校生活の基盤作り、教科主任会議を中心とした授業づくり、部活動の一層の活性化によって、学力の向上、生徒の主体性の育成、そして生徒一人ひとりの進路実現の充実に繋げていく。生徒一人ひとりが成すべきことを自ら考えて自ら行動するような自覚を植え付ける。

○環境整備が周りの目配り気配りができる生徒の育成に効果的であることを踏まえ、美化意識をさらに醸成させる。



平成29年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 年 月 日

校番	57	学校名	熊野高等学校	校長氏名	山田 哲也	全	本
----	----	-----	--------	------	-------	---	---

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校のミッションやビジョンを十分咀嚼し、その実現ために、前年度の状況や生徒の現状を踏まえ、設定されていると思います。</li> <li>県立学校で定められているので仕方ないとは思いますが、指標数が多すぎるといつも感じています。重点化できれば一番いいのでしょうか、この点は難しいですね。</li> <li>生徒の目線に立つことも必要ではないでしょうか。</li> <li>学校経営の「移行期」との位置づけの中で、計画等の設定と現実とずれが生じており、視点があっていないような気がする。来年度の計画は一段と工夫が必要と思う。</li> </ul>
目標の達成状況の評価の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの項目で適切に評価されています。ただし、年度途中段階で年度末目標に到達できないことが明らかになるような指標(特別指導件数やオープンスクール参加者数など)については、通年で評価できるような指標に変更することも検討した方が良く感じました。そのことによって、取り組んでいる教師・生徒双方のモチベーションが維持・向上できるようにすることが大切だと思いました。</li> <li>ほぼ計画通りに取り組まれていると思います。</li> <li>難しい問題があるなかで、各先生方が前向きに粘り強く取り組んでいることがうかがえる。</li> <li>先生方のことばに、「～のような背景により目標には届かなかったがよく頑張っている」というものがある。原因があるので目標に届かなくても仕方ないという雰囲気は校内に広がっているとしたら問題である。</li> </ul>
目標達成に向けた取組の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの担当部署が中間評価を踏まえ、工夫しながら取組を進めていると感じました。特に、生徒指導部は生徒の質の変化に着目し、時宜に応じた指導をされたと思います。また、進路指導部も全ての層の生徒の力を伸ばそうとする工夫があり、中学校として何か協力していければと思いました。</li> <li>教務部の家庭学習時間については、年度途中からでも指標を変更しても良かったのでは、と思います。</li> <li>それぞれの分掌等において取組の工夫もされているとお思います。</li> <li>生徒一人ひとりの進路目標の達成、学力向上や生徒指導の取組は、適切に行われています。</li> <li>アンケートの実施や個人の面談をもっと積極的に行った方が良く感じています。</li> </ul>
評価結果の分析の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価指標や数値の表面上の姿だけでなく、それらのもつ意味を読み解きながら分析されていると思います。</li> <li>結果分析が適切に行われているからこそ、年度途中でも改善が進んでいるとも思います。</li> <li>特に生徒指導の面においては、これから社会に向けて大切な準備期間でもあり冷静な「結果の分析」がなされています。</li> </ul>
今後の改善方策の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>前年度末の評価を踏まえ、平成30年度のグランドデザインを意識した改善方策になっていると思います。各部署のスタンスをそろえながら、中学校や地域社会との連携を深めていく方策を期待します。</li> <li>実現可能な物であること、達成可能であるかという点については年度初めまでに再検討してもいいのではないかと思います。</li> <li>熊野高校のオリジナル性(芸術部門等)や地域密着型をめざし、地元の中学校と交流を積極的に行うべきと考えます。また、保護者にも参加して頂き、学校・家庭が一体となり生徒(熊野高校)を盛り上げる学校作りを進めればと考えます。</li> </ul>
総合評価	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>「地域の未来を創る人材育成のために」というテーマに則って、どの観点においても適切に評価されていると思います。次のステップを楽しみにしています。</li> <li>中間評価の時点で課題となっていた「遅刻者」に対する対応のように、年度途中でも状況に合わせて取組を工夫し、大きな成果につなげているのが素晴らしいと思います。</li> <li>短期間でのPDCAを適切に回し、改善し成果につなげた好事例ではないでしょうか。</li> <li>学力・生徒指導・部活動の三本柱を中心に、割とわかりやすく学級経営が進んでいると思います。挨拶運動をはじめとした徹底した遅刻の指導をPTAを中心に地域の方々にも御協力をいただき、暖かい生徒指導が望ましいと思います。</li> <li>生徒の表面的な落ち着きはみられるものの、個々の習熟度や意識レベルでは大きな差があるため、全体をまとめることに苦心されているなど、学校としては難しい経営を迫られるステージに差し掛かっているようです。</li> <li>「体験の力」を中心とした教育活動が着実に生徒の成長(意識改革)に浸透している。エネルギーはかかるであろうが、これからも有効な教育理念の方向であると思う。</li> <li>入学生の地元占有率の上昇に見られるように、地域の信頼は高まっている。これからは今以上に、地元(小)中学校との連携を深めること、また保護者との本校教育への理解・協働を深めていくことが重要である。</li> </ul>